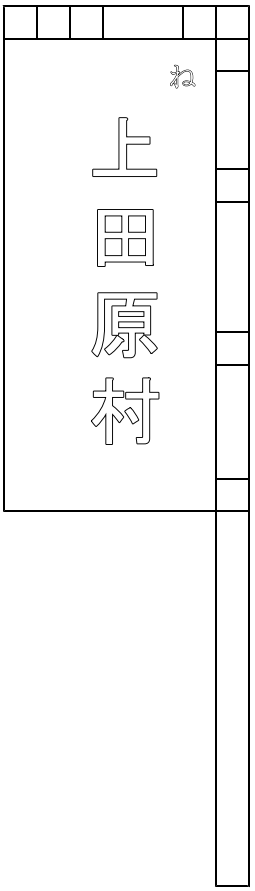

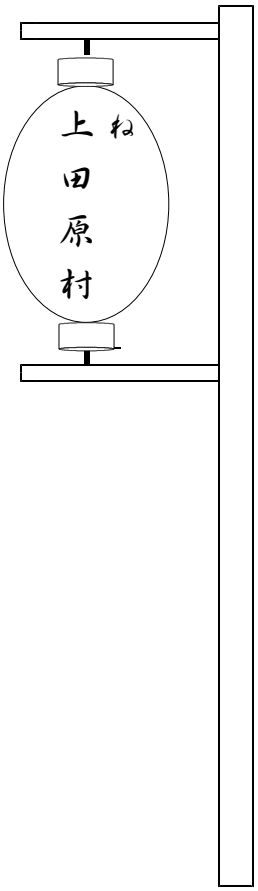

人数百五人
内出人　五拾三人
在村　五拾弐人
鉄砲　六挺
馬　八疋

上田原庄屋安兵衛

第二章　地誌

一、位置、廣袤、地勢

本村は東牟婁郡の東南部に位し、北は上大田村に接し、東は八郎山を以て下太田村及び下里村に隣し、西は高池町及び古座町に連なり南は太平洋に面す。

廣袤は約東西一里八町南北一里二十六町にして其面積約二、二平方キロメートルを有し、

戸数四百三十戸、

人口　男一千人　女一千百人　計二千百人あり

又其総反別は左の如し

田原村総反別（大正七年調）

田	百二十六町四段五畝四歩
畑	三十九町五段二畝十七歩
山林	千五百九十七町七段二畝十七歩
原野	一町一段七畝二歩
池沼	十一歩
雑種地	一段八畝二十八歩
鉱地泉	三歩
合計	一千七百六十五町六畝二十一歩
宅地	十町七段十五歩六合三勺
総計	千七百七十五町七段七畝七歩六合三勺
保安林	一町四段二畝三歩
社寺	三段三畝
溜池	六段九畝二十一歩五勺
井溝	九段十一歩九合五勺
悪水路	五畝五歩
墓地	六段二畝二十三歩
堤塘	一段二畝二十二歩
計	四町一段六畝二十六歩九合
段別総計	千七百七十九町九段四畝四歩五合三勺

田原川　村の中央を貫流して海へ注ぎ、川の両岸は田野開けたるも其他は山岳村内に連立し、其間処々に耕地あり、今総反別に就き平坦部と山間部と比較せんに、

田畑宅地　百七十七町
山林原野　一千六百町

にして総反別の八割九分は山岳地なり。之を郡平均の山地九割五分に比するときは、稍平坦部に近しというべきなり。村落は皆川の両岸に其の居を占め、外に東方海岸に近く荒船、高浜の二部落あり。

二、山及川

那智山脈の支脈縦横に連筆し処々に丘陵を起せり。其の西南隅高池町楠境界に聳ける高峰を最高とし海抜三百九米あり、大畑峠其の南に連なり海抜二百七十一米、又東北隅下太田村界に聳ゆるを八郎山とし海抜二百四十九米あり。

村内に於ける三角点所在地は左の如し、

大字佐部字役見谷（海抜　百三十二米）
大字佐部字大畑（海抜二百七十一米）
大字上田原字西畑（海抜二百四十五米）
大字上田原字八郎峠（海抜二百四十九米）
大字下田原字山谷（海抜　七十一米）

右は何れも明治三十六年の設立なりとす。

田原川は水源二つあり、一は大字佐部奥高池町大字楠の山中より発源し、一は大字上田原億上大田村大字小匠山中より発源し出合に至りて二水流合流し南に流れて下田原に至りて海に注ぐ。流域約三里許、船楫の便なし。其の他渓流数カ所あれども称すべきものなし。

三、海岸

海岸は浦神湾より西南に連なり、角石崎、荒船崎の小斗出あり。岩礁嵯峨として其の海上にイサギ島、横島、大貝嶋、八丁嶋等の島嶼あり。森戸崎は田原河口の東屏を為し、其の間泊船の便あり。之より西方は西山一帯の地海蝕台地をなして角海岸に迫り、尾沛湾を経、善八崎に至りて古座町津荷に接す。其の海上に一つの嶋等あり。海岸線の長さ二里二町五十間に及べり。

四、地質

当村の地質は第三紀古層に属し粘板岩の地盤上に其位置を占むることは本郡各地に同じ、而して粘板岩は元来罅隙を生ずるを以て、此の大罅隙に石英粗面岩を噴生出せり、即ち浦神湾より本村内の佐部、上田原を経て高池町に入り古座川の両岸に沿うて上り、三尾川村の犬吠峠に至りて滅す。其の間に数条の大帯をなす。各所に散在せる虫喰岩の奇観は皆其の中に在りて、即ち緑色凝灰質石英粗面岩なりとす。而して粗粒質石英粗面岩は此の間に交て散在せるも其の数多からず、左に之を概況すべし。

①火成岩類

本郡に露出する火成岩は、大部分石英粗面岩にして之を細別するときは粗粒質石英粗面岩、凝灰質石英粗面岩、玻璃質石英粗面岩の四種となすを得べし、流理質玻璃質の両者は当村に其の露出を見ず。今粗粒質凝灰質の三者を概記すべし。

粗粒質石英粗面岩

南牟婁郡鷲巣山附近より熊野川を横断して那智山に至るもの殆ど全部は本岩より成り、小さなものは古座川に沿いて三尾川村以東浦神湾に引ける帯中の諸点、小川村長洞尾、大島村の西辺、橋杭等各所に監察するを得べく、凝灰質石英粗面岩の逆発後、其の餘隙に乗じて発現せしものなり。本岩は外観花崗岩に類似し、俗にミカゲを以て称せられ、有色鉱物比較的少量にして善く久しきに堪へ、切り出しも容易なるを以て盛んに建築材料とせらる。

凝灰質石英粗面岩

本岩は緑色及び白色の二種あり、緑色のものはもっぱら古座川筋の地に添うてあらわれ岩体は元来一弱の緑色石英粗面岩なれども風化浸食作用の為に褐黄色より濃褐色に変じ、又鈍円錐体に変じ尚を此の面に凹面を作り、進みては此の凹面に多孔の彫刻を現し（ムシクイ岩）斯くて一種の奇景を造出せり。即ち処々に散在せる蝕巌は是なり、一塊の標本によれば、直に凝灰岩を想起すべしと雖も、露出の現状、岩石学上の観察等よりして、元に併発せしものたるを知るべし。俗にニキビイレの称あり。水蝕に抵抗する事弱き故に粗悪の建築材として多く溝梁、礎石、堤防、石垣用にせらる。

②水成岩類

本村の内下田原は全部水成岩より成り、地質図那地図幅中の第二区域に属せり。今地質説明書に依り之を概記せんに、本郡の太田川筋を延長して湯の峰に達する線を東端とし、西牟婁郡朝来村、生馬村、下三栖村を西端にする区域を第二区とし、一般に北四十度乃至六十度東の走向を有し、西北又は東南へ傾斜す、其の西北斜するもの多くして五十度を最大角度とすれども、東南斜にするものは二十五度を最大とす。岩石は火山岩を除く以外は、蠻岩、頁岩、泥岩、及び石灰岩にして、累層中の砂岩は第二区域のものに比して大いに硬く、白色或は灰色なり。白色のものは粗粒質なり粗粒質にして多くは厚層を為し、長石質なり。時に蠻岩質に移るものあり、灰色なるものは細粒質緻密なるを常とし、薄層を為して頁岩と互層するものに多しとす。頁岩は灰色乃至黒色にして往々帯緑帯青なり。而して砂質なるもの珍しからず、蠻岩は往々厚層を為し、砂岩頁岩互層及び覆せり。砂を以て膠結物とし尤頭大より(普通鶏卵大以下)砂岩、頁岩、閃緑岩礫より成れり。

③沖積層

第四紀層に属せる沖積層は下田原の海岸付近僅かに之を認むるを得べし。地質説明書に曰く

「本層は沖積層期以後殆ど地変なく、今日の河海が沈積せし跡にして、現時尚を其の作用を連続するものなるを以て、地質は柔軟の泥土或いは砂礫より成り、層位水平なるを定則とす。本図幅は殆ど全土山岳地にして至る所山相迫り河亦多くは小にして流勢急なれば、従って沖積層の見るべきもの自から少なし、御坊町、南部町、新宮町於いて稍大なるものあるに過ぎず。」

④海蝕台地

西山一帯の丘陵は熊野海岸(宇久井村より日置川口に至る約二十里間)特有の海蝕台地の一にして海抜百尺位の高さにて極めて緩傾斜を以て南方に傾斜せり。これ海水の浸蝕作用の結果により、海中に生じたるものが、土地の隆起作用に因って陸上に表出したるものなりとす。

⑤鑛泉

鑛泉は大字上田原の渓間野瀬の間に鷺湯温泉あり。又大字佐部の渓間湯ノ谷に薬師の温泉あり。汲み取りて自家用療養に供するのみにして未だ浴場の設けなし。

第三章　区劃　及　戸口

一、村内小字名

大字下田原ノ部

城道吹上　和田ノ前　濱　上之地　坊　渡り瀬
下モ才　片田　丸山　堂道　女郎神　山中　城郭　荒船　山谷
東向　中屋　中ノ川　玉蔵院　五平　ヘクサビ　宝島　津荷ノ郷

大字佐部ノ部

佐部ノ口　地下坪　根木地　佐部ノ丸　道々路口　小池ノ口
長浦　乙ガシキ　湯ノ谷口　下越　瀧ノ口　大河　大畑ケ
湯ノ谷奥　木村　廣田　向井ノ宇井　脇ノ地　廣井　田ノ洞
芝田　津荷郷ノ奥　ゴラギ　瀧ノ頭　根ジ見　大川端　据石
峠ノ前　大畑谷　ヲジカ畑　石畑　市洞

大字上田原ノ部

石瀬戸　上段　物譯場　枇葉谷口　蟦ノ平　柿ノ嵜　緑リウ井
野ヲ瀬　鍋ノ裏　徳右衛門地　庄下川口　江崎　宇井嵜　臼木平
荒堀　ヒヱ畑　スクノウ井　高畑　折橋　芝崎　下タウ井　杢崎
堂ノ谷　杵谷口　柿屋立場谷　鍛冶ヶう井　ツム里ヶウ井　漆畑
柱松　池ノ地　月コ　小檜曽原　佛ノウ井　道ノ平　船越
品小森　トミキ　立場谷　大川坪　堂ノ久保　池田　シュウデン
西ノ本　和田谷　尾地ウ井　車田　タケ瀬　岡ノ坂　皆瀬川
コリボ　野瀬　地蔵ノ前　和田地　鍛冶ヶフチ　宮ノ本　岡ノ前
和田ノ洞　大郷　落畑　秀谷　竹ノ木　二部田　双河敷　宮崎
竹ノ鼻　久司洞　釜ヶ谷　杵谷　足谷　保地ノ平　永田　岩屋
河原田　岡ノ平　長谷　西畑　大杉谷